聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.194
2023.12.1

巻頭言
Greeting

× 横山 昌英
Masahide Yokoyama
聖書神学舎 教師
（八王子キリスト福音教会 牧師）

Profile

聖書神学舎 31 期生。卒業後、今泉キリスト福音教会 (JECA) にて 5 年間奉仕。以後2つの教会を経て、2014 年度以降は八王子キリスト福音教会 (同) にて奉仕。

「ご自分の収穫のために」

マタイの福音書 9 章 37,38 節

今年 9 月に開催された第七回日本伝道会議には出席しませんでしたが、『宣教ガイド 2023』(JEA 宣教委員会宣教研究部門編) からいろいろと学ばせて頂いてます。近年における日本の宣教の現状と分析、今後の宣教についての考察と提言は、これからますます重要な示唆となっていくことでしょう。

かなり以前から教職者の不足が指摘されていました。同書を通し、牧師の不足とこれに伴う教会数の減少が未だ続いていることを確認しました。多くの教団で後継者問題に取り組んでいるものの、楽観視はできません。「超少子高齢化時代においては、もはや単純に献身者を増加させる努力には限界があるという現実をまずしっかり受け止めなくてはならない」(196 頁) との言及に思わず唸ってしまいました。

働き人の必要という主題で、必ずと言って良いくらい引用されるのは、以下のイエスのおことばでしょう。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(マタイ 9:37,38)

ある方の指摘で気づいたのですが、新改訳 2017 で「ご自分の」が付加されました。直前に「収穫の主」とあるので、第三版のように「ご自分の」を欠いても問題とはなりません。きちんと訳出したことで、「収穫」とは他の誰でもない、主なる神の収穫であることが明確になりました。

このおことばは、福音宣教の中、群衆が「羊飼いのない羊の群れのように、混乱し、打ちひしがれていた」(36 節私訳) 状況に接した際のものです。明らかに急を要する事態であり、素早い対応が求められます。直ちに奉仕者を募り、事に当たらせるべきでしょう。なのに「働き手を送ってくださるように祈りなさい」とはあまりにも悠長です。しかしこの「祈り」こそ、イエスが私たちに命じておられるなすべきわざなのです。

この後に着目しますと、「(そして) イエスは十二弟子を呼んで…権威をお授けにな」ります (10:1)。主は命じるだけでなく、「祈り」に応え、自ら「働き手」の育成に尽力されます。

学び舎では、諸教会がお送りくださった献身者が働きの場へと遣わされるための学びと訓練を提供しています。これに対し、神学生も誠実に主とみことばに応答して日々を重ねています。深刻な人手不足の中、非効率的にも思えますが、福音宣教の一翼を担う大切な営みです。教会も学び舎もともに宣教の主を仰ぎ、さらに「働き手を送ってくださるように祈り」合いたいと願います。「ご自分の収穫」と言われるほどの確かな約束を信じて。

No.194 Topics

- p03 秋の行事から：リトリート、オープンデイ
- p04-05 証：研修生、教会奉仕、奉仕教会の声
- p06 学びの窓
- p07 聖書学研究所から

とりなしの祈りの目指すところ

伊藤 暢人
Nobuhito Ito
聖書神学舎 教務主任

エルサレムよ、
わたしはあなたの城壁の上に見張り番を
置いた。
終日終夜、彼らは、一時も黙っていてはな
らない。
・・・
主がエルサレムを堅く立て、
この地の誉れとするまで。
イザヤ書 62 章 6,7 節

預言者の務めの一つは「見張り番」として昼夜問わずとりなしの祈りをすることです。そして、そのとりなしの目指すところは、祈りの対象が神の目に喜ばれる最後的な栄光の姿に変えられていくことにあります。「主がエルサレムを堅く立て、この地の誉れ（賛美とも訳せる語）にするまで」です。私にとって最近教えられたことでした。そして恵みに支えられなければ、できないことだと思わされています。

研修生たちがそのようなとりなし手に成長していけるように、また教師たちがそうであるように、覚えていただけたら幸いです。

学舎では

学舎では新型コロナに罹患する研修生がぽろぽろと出つつも、幸いその人以上に感染が拡大することはなく、守られています。チャペル後のコーヒータイムや食事の交わりも色々に注意・工夫しながら、再開しています。机上の学びとともに、人との交わりから得ることも多くあります。また、同じ時間をともに過ごした研修生時代の交わりは、一生ものの財産です。寮生活や研修生会の活動が豊かな交わりの機会となることを願っています。

後期から、出産・育児等で休会していた姉妹2名が復会し、研修生数は 18 名となりました。とはいえ、諸教会において伝道者数の減少、現在・将来の欠員が具体的な数字で語られている昨今、まだまだ不足を感じています。収穫の主が「ご自分の収穫のために」働き手を送ってくださるように、切に祈らされます。10 月から 2024 年度要覧を発行し、来年度の研修生募集も始めているところです（今年は要覧に奨学金の可能性を従来より積極的に表示しています。諸物価高騰の中ですが、研修費や寮費・食費等も据え置きにしました。）

「聖書神学舎モノグラフ」

新たな働きとして「聖書神学舎モノグラフ」を創刊しようと考えています。第 1 号は 2023 年度夏期研修講座「今、救済論を考える」の講義録を発行する予定です。執筆者たちの筆の進み具合次第ですが、近いうちに（12 月中?）完成のご報告をできればと思います。無料で、献金を募る形で発行することを考えています。

また、昨年に続いて、2 ～ 3 月には卒業生・修了生を対象としたオンライン継続教育クラスがもたれます（最終ページをご参照ください）。聖書神学舎をより多くの方に、特に若い世代に知っていただくための「聖書神学舎デイ」も 2024 年 3 月 16 日 (土) に、今年は東京のキリスト教朝顔教会を会場に行います。参加いただける方はぜひご参加を、あるいは身近な人の参加を励ましていただけたら幸いです。

この通信が出る 12 月には秋の諸行事はすっかり終わり、クリスマス、年末へと走っている頃です。卒業予定者には勝負の冬となります。引き続き学舎のためにお祈りくださいますようお願い致します。

渇いています、と祈る

川口 美琴
Mikoto Kawaguchi
聖書神学舎 本科2年

今年度は、田村先生ご家族を講師にお迎えし、「神を待ち望め–詩篇42篇を味わう–」をテーマに、リトリートしました。敢えて遠出はせず、日々の生活の場である学舎を拠点としつつも、忙(せわ)しなさから退き、みことばと祈りをとおして、主との交わりに過ごす時が与えられました。

先生ご夫妻は、それぞれのこれまでの歩みについて、研修生の関心に寄り添いつつお分ちくださり、私たちは、普段とはひと味違った学びと励ましをいただきました。授業の外で、親しくお交わりする機会が与えられたことも感謝でした。

また、詩篇42〜43篇から、自らのたましいの声に耳を傾け、その渇きに気づくこと、そして、そこに語られている主の御声があることを教えられました。私は悩む者です、渇いています、と主に申し上げること。うなだれ、思い乱れる自らを取り繕うことなく、主の御前に出ること。現実は変わらずとも、なおも神をほめたたえる詩人の姿。困難にあっても、祈りの中で信仰が成長する詩人の姿。

2日間、みことばと祈りのなかで教えられたように、苦しみや貧しさにあっても主を賛美し、あえぐようなたましいを主の前にさらけ出して祈る者でありたいと願いながら、後期の学びの務めへと戻って参ります。

リトリート

オープンデイ

待ち望むことをとおして

寺村 幸雄
Sachio Teramura
聖書神学舎 本科3年

「制限を設けないオープンデイは4年ぶり」という校長の注意喚起を耳にして、期待と不安が入り交じる複雑な気持ちで当日を迎えました。不安とはもちろん、閑古鳥が鳴くような状況です。今春、一気に若返った感がある学舎内（昨年の卒業生の方、ごめんなさい）では、一般の大学でのオープンデイを彷彿とさせるような装飾など、歓迎ムード全開で待ち望んだからです。

開けてびっくり！そんな不安は一蹴されました。私の知るコロナ禍のオープンデイが、入会検討者しか来場は認められない特殊事情があったとはいえ、こんなに多くの方が神学舎に関心をもっておられるのかと驚き、その盛況ぶりに励まされる一時となりました。

献身者のため、祈り支えてくださっている方に直接お目にかかれた幸い。さらに来春、再びお目にかかるであろう方との出会い。もちろん、オープンデイ経験者しか、入会できない訳ではありません。私自身、過去の通信を読み漁る以外、何の予備知識も持たずに入会しましたので。

ですから、来春、再会できる方のため、加えて、お初にお目にかかる方のため祈っています。私たち以上に待ち望んでおられる主の召しにどのように応えられたのか、伺える日を楽しみに。

生きたみことばと交わりの中で

竹内 基喜
Motoki Takeuchi
聖書神学舎 本科3年

私は聖書宣教会という学び舎に馴染みのある環境で育ちました。父や周りの牧師先生が卒業しており、毎年母教会には奉仕神学生を送り出してくださいました。そのような環境でしたが、自分が入会することは想像していませんでした。そんな私が、みことばを深く学ぶこと、人々に届くための正しい聖書知識を求めて入会することとなったのは、2021 年度でした。

ひたすら沢山学び、規則正しい真面目な生活を送る、そのようなイメージ。ネガティブな言い方をすれば、お固い、遊び心の無い研修生活を想像していました。しかし、入会して待っていたのは、私の想像を遥かに超える恵みでした。

確かに学びに関しては、最初の 1 年は苦しかったです。毎日のようにテストや課題があり、学ぶことを避けてきた私には苦しい時期もありました。それでも、2 年生になり、聖書釈義が始まると、今まで学んできたことが繋がり始めます。言語の学びだけでなく、組織神学や教会史などで学んだことも活かされていく実感がありました。そして、学んでいった先でみことばに確信を持って語れるようになる喜びを少しずつ知っていく日々でした。みことばの奥深さ、豊かさを知って、私という弱々しい人格を主が用いてくださる、その希望を与えられた 2 年生以降の学びとなっています。

また、その学びを励まし合う仲間が与えられました。研修生たちとの交わりはいつも素晴らしいものです。楽しく笑い、共に喜んで、時に共に悲しむ。もし、羽村にこもって修行僧のようにストイックに生きているというイメージ（私が過去に抱いていたイメージ）があるとしたら、それとは全く異なるものです。一緒に祈ったり、みことばの分かち合いをしたり、時には一緒に遊びに出かけたり、夜な夜な互いのことを語り合ったり、信仰の友との生き生きした生活が宣教会にはあります。まさに全寮制の特権と言える恵みです。

3 年目の学びも後半に入っています。4 年間の学びの後に、教会や、フルタイムの宣教の場へ遣わされていくことを祈り求める日々です。まだ将来のことは分かりませんが、宣教会で学んでいる“基盤”を大切にして遣わされていきたいと願っています。みことばの奥深さと豊かさを追い求め、神様に弱い自分を受け入れて頂きながら語っていく。そして、遣わされた地で与えられる信仰の仲間と、主にある交わりを豊かに喜んで生きる。そのような者へと主が成長させてくださると、心から期待しています。

学びの大切さ

昼田 理江
Rie Hiruta
聖書神学舎 本科3年

生田丘の上キリスト教会に来て驚いたことが２つあります。それは「祈り」と「奉仕」です。礼拝の祈りはいつも三位一体の神が意識されており、心からアーメンと言えます。礼拝の感謝の祈りも、特定の奉仕者だけでなく教会員が順に捧げておられます。子どもキャンプでは、子供５人に対して大人の奉仕者は２０名を超えていました。各部会もしっかりと組織化され、若者から高齢の方まで教会全体がよく仕え合っています。

どうしてこんなにも教会全体がよく祈り、仕え合うのかと考えた時、思い浮かんだのは聖書の学びでした。コロナ禍で食事の交わりは減っても、学びは継続されていました。礼拝前や各部会で学び、外部講師を招いて学び、個人クラスもなされています。この教会の方々は礼拝や祈祷会に加え、これらの学びからも神の愛や恵みを受け取り、感謝の応答として祈り、仕える、という好循環が生まれているように思います。聖書の学びは、主を中心として愛し合う共同体を育みます。その実例を見せていただけてとても感謝しています。

けれども同時に、この教会ほどには学びの環境が整っていない教会のことを思わされます。そのような教会に遣わされるために、私は今、学びの機会を頂いているのだと。主がみこころのままに私を整え、用いてくださるようにと願っています。

05 奉仕教会の声
Voices from the Churches

陶器師なる主の働き

野村 天路
Takamichi Nomura
生田丘の上キリスト教会 牧師

私たちの教会は、しばしば奉仕神学生に来ていただき、教会の働きを助けられ、教会の交わりが豊かにされ、信仰の成長の機会をいただいています。教会学校の教師など具体的な働きにおいて助けられることはもちろんですが、そもそも神学生の存在自体が教会の信仰の励ましになっていると思います。

新しい神学生には、祈祷会などの集まりで救いと献身の証をしていただきます。神学生にとっては自己紹介のような時でもありますが、教会にとっては、生きて働いておられる神様を知る機会にもなります。神学生の背景や召しの経緯は、人それぞれです。神学生から召しの経緯を聞くことによって、それぞれの人の成り立ちを深く知り、その人に深く関わり、召してくださる神様を知るのです。そのように一人ひとりと深く関わり召してくださる神様を知ると、今度は、自分自身にも関わってくださり導いてくださる神様に期待することにつながっていきます。教会にとっては、奉仕神学生との出会いと関わり自体が大きな恵みです。

今後とも機会が与えられれば、神学生を受け入れ、働き人を訓練する働きに関わらせていただきたいと思います。人を取り扱い、ご自分の働き人へと練り上げてくださる主の働きに少しでも関わることができれば幸いです。

File No.026

「再び建て直す」

三浦 譲
Yuzuru Miura
聖書神学舎 教師

「その後、わたしは倒れているダビデの仮庵を再び建て直す。その廃墟を建て直し、それを堅く立てる。」
（使徒の働き 15 章 16 節 [新改訳 2017]）

アモス書 9 章 11 節（「その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。その破れを繕い、その廃墟を起こし、昔の日のようにこれを建て直す」）の引用である、上記の使徒の働きのみことばは、新改訳第 3 版では次のように訳されていました。「この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。」2017 では「帰って来て」がなくなり、「建て直す」に「再び」が付け加えられました。

しかしギリシア語原文を見ると、アノイコドメオー（“to rebuild”）と共に、確かにアナストレフォー（“to turn”）という語があります。ESV (English Standard Version) も “After this I will return、and I will rebuild the tent of David …” と訳します。けれども、2017 訳でよいのでしょう。

新約の注解者たちは、ここでアナストレフォーの類似語であるエピストレフォー（“to turn”）が登場する七十人訳エレミヤ書 12 章 15 節に注目します。そこにはエピストレフォーがエレエオー「あわれむ」と共に登場します。しかし旧約のエレミヤ書 12 章 15 節は、第3版でも 2017 でも「わたしは再び彼らをあわれみ」と訳されます。ESV も、“I will again have compassion on them” と 訳します。つまり、ヘブル語ではそこにシューブ（“to turn”）という語がラーハム「あわれむ」という語と共にあるのです。これは “Verbal Hendiadys”（動詞の二詞一意）の用法によるもので、シューブは「再び～する」という機能を持ちます。七十人訳のエレミヤ書 12 章 15 節ではヘブル語のシューブに当たる語がエピストレフォーだと言えます。しかし NETS (New English Translation of the Septuagint) は、“… I will turn and have mercy on them” と訳しています。新約の注解者たちも同様に訳します。動詞の二詞一意の用法を見落としているように思えます。

新約では一度だけですが、使徒の働き 15 章 16 節において、七十人訳のエピストレフォーに代わってアナストレフォーがヘブル語のシューブに当たる語として登場し、アノイコドメオーと共に「再び建て直す」という意味になるのだと思われます。ギリシア語アナストレフォーとヘブル語シューブの関係については、私一人では気づかなかったことであり、旧約の先生と共同の翻訳プロジェクトを通して教えられたことでした。

しかしこのように理解すると、使徒の働き 15 章 16 節の最後の「堅く立てる」の語にも関わってくる話になります。この語は アノルソオーで、七十人訳アモス書9章 11 節には出てこない語です。興味深いことに、七十人訳では “to set” という意味で、数か所でダビデ王国の王座に関連して登場します。例えば、「・・・わたしは彼の王座をとこしえまでも堅く立てる（アノルソオー）」（2サム 7:13）です。使徒の働き 15 章 16-18 節におけるアモス書引用では、「主がダビデ王国を再び建て直す」ということが強調されているのだと思われます。

詳しくは、『「みことば」聖書翻訳の研究第２号』をご覧ください。このように、新約においてもまだまだヘブル語の用法から学ぶべきことが多く残されています。旧約と新約を切り離さないで研究していくことの大切さを教えられています。

この時代にて、研究する

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書学研究所 所長

現在は時代の転換点にあると言われます。見える世界は益々混迷の中にあり、見えない、神の「みことば」ゆえの「戦い」も日に日に激しくなっています。そのような「この時代」に、情報の氾濫するなかで、真偽を見分ける知恵と忍耐力が試されるのが、研究者の直面する現実です。

まず、研究所の新しいプロジェクト「N. T. ライトの神学を問う」について紹介します。所員の三浦譲先生をリーダーとする、2 年間（延長可能）のプロジェクトです。日本長老教会の児玉剛師をプロジェクト研究員としてお迎えし、メンバーは三浦師、児玉師、それに津村です。しばらく前から、英語圏で「新しいパウロ神学」(New Perspective of Paul = NPP) という、パウロ理解に於ける新しい見方が話題になり、我が国でも N. T. ライトの書物がいろいろ邦訳されています。この見方に対して、所謂「福音派」の中に激しい意見の対立があります。コーネリス・P・ベネマ著・安黒務訳『「パウロ研究の新しい視点」再考』（いのちのことば社、2018 [orig. 2006]）、ジョン・パイパー著・中台孝雄・内田和彦訳『義認の未来：N・T・ライトに対する応答』（いのちのことば社、2020 [orig. 2017]）や、日本長老教会大会会議資料『N. T. ライト神学の検証と評価』(2022 年 11 月 22-23 日)（http://cms.chorokyokai.jp/-files/2916/7853/9047/npp20221123.pdf）は、N. T. ライトのパウロ理解に対して批判的に応答しています。本研究所のプロジェクトとして、NPP の立場が真に聖書釈義 (OT/NT) に基づくものであるのか、第二神殿期のユダヤ教がパウロ神学の理解にどのように役立つのかについて考察したいと思います。

次に、皆様の祈りに支えられて、拙著『古代カナンにエル祭儀があったか：ウガリトの宗教と言語に関する諸論文』（Was There a Cult of El in Ancient Canaan? Papers on Ugaritic Religion and Language. Tübingen: Mohr Siebeck, 2024）が来年早々出版されることになりました。本書は、カナン / ウガリトの「神、エル、ILHM」が、その言語形式がヘブル語の「神、エル、Elohim」と同じであるが故に、旧約の神の民にとって大きな「落とし穴」になったことの意味を考えることを究極の目標として書かれています。日本の伝統的な「神（カミ）崇拝」と「先祖（カミ）崇拝」が、カナンのそれらと類似していることに注目して、少しでも、日本に於ける「真の神」宣教に寄与できればと願います。日本語版（注なし）は、ホームページにアップする予定。

最後に、日本にいながら研究用の諸資料を入手する方法として、いくつか参考になる情報をお知らせします。個人の立場で JSTOR に登録すれば無料で月 100 本までの論文を読むことが出来るようになりました。Academia, Google Books, Tyndale House (MyAthens 要問い合わせ) 等を用いれば、必要情報を入手出来ます。パンデミックを経験した学者たちのために、互いに情報をシェアする方向へと世の中が変わってきたことは歓迎すべきです。学術雑誌の購読料が数倍も値上がりして、小さな図書館では標準的な雑誌すら揃えることが難しい時代ですから。

引き続き、聖書学研究所の働きのためにお祈りとご支援をお願いいたします。

聖書宣教会通信 No.194 発行者：末松 隆太郎 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 http://www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

「継続教育」の恵み

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

聖書神学舎の拡大教育は聖書塾・聖書神学舎デイ・教会音楽講座（2024年度開講）として刷新され、継続教育として「旧約・新約釈義」のコースが加えられました。少し時間が経ちましたが、2月、3月に提供した初回（「牧会書簡を読む～テモテへの手紙第一」赤坂泉）の報告と、第二回の予告をいたします。

オンラインで釈義の学びを提供する試みに感じていた少しの不安は、47名の参加者の活発な参与によって初回から霧散しました。運営面ではアシスタントの吉村直人師に助けられ、120分4回の時間がスムーズに流れました。もう少し回数を加えたいと思いました。働きの場は羽村からブラジルまで、世代は20代から70代までという多様な同労者がたに、交わりや情報交換の時間をもっと提供できたのに、とも。

具体的には第一テモテを、原語からの釈義がとりわけ重要である箇所や牧会への適用の豊かな箇所を取り上げて講義と演習を重ねるようにして、読み進めました。改めて各自で梗概を作り、数名に釈義の発表をしていただき、また説教のアウトラインや原稿を提供していただいて、一緒に学びました。挙げられた疑問を検討した結果、新改訳2017の訳業に対しても小さな貢献ができました。また、これを機に幾つかのサークルが生じて学び続けること企図して、原典講読、釈義の勉強会、説教原稿の相互チェックなどの小グループを作った結果、少人数ではあっても、釈義のサークルが今も続いていることも嬉しい産物です。

アンケートからは不足や改善点も、期待や必要も具体的に知らされました。
第二回は、鞭木由行師の担当で「エレミヤ書を読み・考え・語る」というテーマで提供されます。（2024/2/13,20,27, 3/5。詳細別途。）みことばの奉仕者たちのために広く用いられますように。

近況と祈りの課題

- □ 齊藤一誠兄が、主に広報関連を担当する非常勤職員として加えられたことを、主への感謝と諸教会の祈りへの感謝とともに、お知らせします。10月から、意欲的に、的確に働きを進めてくださっています。
- □ 専任教師が加えられることが、引き続き重要な祈りの課題です。
- □ 研修生の様子は本紙の随所で垣間見ていただける通りです。主に信頼して最善を尽くす歩みを、主が顧みて、祝してくださることを感謝します。霊肉の健康のためにお祈りください。
- □ 夏から秋は、各地区同窓会が研修会等を開く季節で、招かれた教師たちが各地に赴き、対面の奉仕が続きました。
- □ 献身者が起こされることをさらに熱く祈りましょう。この学舎にも主が選ばれた者たちが導かれることをお祈りください